

明治期の落語の新作について

三 村 昌 義

「要 旨」 いわゆる古典落語と称されるものと、新作落語と称されるものとの区別は、曖昧な部分があり、今日、古典とされる話材も、実は、落語が庶民の娯楽の中心であった明治期に、文明開化の風俗、風物を取り入れて新作、或いは改作されたものも多く、又、明治期に輸入された、西洋の話材を翻案したかと思われるものも多く見受けられるように思われる。

「キーワード」 落語、文明開化、翻訳文学

はじめに

新作落語、古典落語という呼称が用いられるようになったのは、おそらく昭和三十年代の後半から、四十年代の最初頃ではないかと思う。それは、いわゆる落語ブームが起こり、桂文楽（八代目）や古今亭しん生（五代目）が紫綬褒章を受けたり、三遊亭円生（六代目）、桂小文治、柳家小さん（現・五代目）、林屋正蔵（八代目）、金原亭馬の助、

桂小南(二代目)、笑福亭松鶴(六代目)らが、相次いで芸術祭賞、芸術祭奨励賞、大阪府民劇場賞を受けたりして、落語研究ということが、盛んになり始めた時期とも重なる。おそらく、その時分、盛んに創作されるようになった新作の落語に対して、古くから伝承されているネタを、古典落語と呼称するようになったものであろう。

しかし、この新作・古典という分類法は、そう学問的で、明確な区別とも言い難い点があるのは否めない。というのは、現在、古典落語と言われているものも、もとは新作であったわけであるし、また作られた年月、作者まではつきりしていても、その後、多く咄家はそのネタを手掛け、すでに古典落語として扱われているものも、実は多いからである。

上方落語の祖の一人である露の五郎兵衛の噺本『露休置土産』巻四(宝永四年刊)に、彼の手によって新作されたものと思われる、「猪のしゝの蘇生」と題する次のような咄がある。^①

ある狩人、ゐのししを見付、打とらんと思ひ、あわてゝ玉をわすれ、から鉄炮をはなしける。うろたへたるしゝにて、おどろきて死けり。かゝる所へしゝ買來りけれハ、さいわいとおもひうりけるが、買手何と此しゝにはてつほうのあともなし。いつ死だもしれぬ。ふるうハないかといへは、かりうどたつた今打ました。いや古そうなとて引かへし見れハ、彼しゝむくゝとをきあがり、山をさしてにげける。狩人ゆびざしして、あのあたらしさを御覽ぜ。

細かい設定は違うが、これが、上方落語『池田の猪買い』の原話と考えられている。『池田の猪買い』は、そう大きなネタとされているわけではないが、それでもきっちり演じると、三、四十分はかかる。露の五郎兵衛が、この咄を、辻咄としてどのように演じたかは不明の部分が多いが、当時の咄の長さは、そう長くはなかったと思われるから、ほ

ぼ右の引用程度のものであったかと推測される。したがって、この咄は、五郎兵衛以後の、何人もの咄家たちがこの咄に手を入れ、ギャグやくすぐりを付け加えて行った結果、今のような長さになったということが出来るであろう。しかし、誰が、いつ、どんな工夫を、この咄に付け加えて行ったのかということは、全く分からないのである。

『代書』は、昭和十五年五月発行の『上方はなし』四十六号に発表された、四代目桂米団治（明治二十九年〜昭和二十六年、当時は二代目米之助）作で、自らも演じた咄である。今は、差別的表現の個所があるので、前半のみで切って演じられるが、桂米朝、桂春団治（現・三代目）らによって受け継がれ、ことに春団治の演出は、咄に登場する事件その他が、現在では耳遠くなっているにもかかわらず、これを完全に古典として演じ切り、その克明な描写と相俟って、一つの完成美を感じさせている。その一方では、桂枝雀（現・二代目）の演出のように、原作に出て来る御大典（昭和天皇の成婚を指す）が古くなったので、年月日ということをも、全く抜きにして演じるという工夫もなされるまでになっている。そして、今や、この咄は、誰もが古典落語と称して、異議を挟まないまでになっている。

このように見て行くと、古典落語、新作落語という区別は、実に曖昧な一面を残しているということに気が付くであろう。が、一つ言えることは、作者がはっきりしている、していないによらず、何人もの咄家によって、そのネタが洗練、完成され、その時代々々の観客に笑いを提供し、今後その生命力があると考えられるものは、古典落語と称してもいいのではないかということである。現に、古典と称される咄は、そのようにして今日にまで伝承されて来たわけである。言い換えれば、作者や作られた時代がはっきりしていても、その当時には受けても、時代が変わると観客に分らなくなってしまうもの、分らないから演じ手も絶えてしまったというような咄は、古典落語と称することは出来ないということでもあろう。それは、新作ほど、すぐに古くなりやすいということをも意味している。素人落語ながら、筆者の若い時の経験を述べると、ある咄のマクラで、

「いい時計をしているねえ、君。本当にいい時計だよ。でも、針が付いてないねえ。」

とやったところ、爆発的に受けた。が、デジタル時計が多くなった現在では、このギャグは分からない。腕時計と言えば、文字盤に大小の針が動くものしかなかった頃だったから、面白かったのである。全てがどんどん新しくなっていく時代、かえって現代に時代設定をした咄が、命脈を保って行くことのほうが難しい。現代の新作が、昔話や伝説をもとにし、時代を過去に置いたものが増えているのは、その証拠とも言えるであろう。

ところで、明治という時代は、それまでの幕藩体制とは政治形態も異なり、何よりも文明開化の波が庶民生活の上にも押し寄せ、やがて日清、日露という、日本という国が、それまで経験したことのない戦争へと走って行った、実に目まぐるしい変化の起こった時期であった。が、そんな時代の中であって、落語という芸は、旧幕時代と同様に、その興業には種々の規制があったにもかかわらず、したたかに生き残って行った。というよりも、その芸が、もっとも発達を遂げた時代であったと言うことが出来るであろう。それは、数多くの名人上手が輩出したということ、また何よりも、庶民の娯楽の中心の一つが、落語を中心とした、寄席での雑芸にあったということが、その大きな理由と考えられよう。つまり、落語は、明治という時代の変化に合わせて、古くからあったネタを改変し、或いは、新たなネタの創作ということにも力をそそぎ、庶民の生活感情を捉えて離さなかったのである。

現在、いわゆる古典落語とされるものは、東京落語、上方落語を合わせると、そのネタの数は、五、六百にもなるだろうか。そこへ小咄を加えると、一千以上の数になることは間違いない。もちろん、それらの大部分の作者は不明で、また、いつ、現在演じられるような形に整えられたのかということも、はっきりしないものがほとんどである。しかしながら、その多くが、その咄の登場人物、風習、風俗などの時代設定が、そのまま現在として通用した明治期であることを考えると、古典落語と称されるネタが集大成されたのは明治期であろうと考えるのは、そう的はずれ

たものでもないと思われる。以下は、その可能性を、咄の内容から推定し、また、明治期の咄家の作と伝えられる咄についても、その蓋然性を、幾つかの要因から考察した一例を示したものである。

一

文明開化と呼ばれる時代になって新しく登場して来た文物、社会現象などは数限りないが、落語の中によく登場し、一つのジャンルを成しているのは、人力車と士族の商法を取り上げた咄である。

人力車は和泉要助なる人物の発明と言われ、外国から輸入されたものではないらしいが、駕籠よりも数倍の早さを持ち、かつ庶民にも気軽に利用出来たらしく、人力を扱った咄は実に数多い。これは、今までは、乗り手が一人、乗せ手が二人だったのに対し、人力は、乗り手と乗せ手が一対一という関係になったため、ともすれば、乗り手のほうが強い立場に立ったり、とは言っても、梶棒を上げられれば、たちまち乗り手は後ろへ引っ繰り返されてしまうということもあって、当時は、それ以前にはなかった事件やトラブルが、人力を巡って、色々と、実際に起こったらしい。それが、笑いの種となつて、『稲荷俵』『いびき俵』『げんこ俵』『士族の俵』『素人俵』『反対俵』『幽霊俵』『親売り』『柿取り』『人まね』など、多くの咄が創り出されたようである。これらの中には、今は演じられなくなったものもあるが、いずれも車屋そのものが主人公で、単に咄の中に人力が登場するだけのものは、さらに数が多い。

さて、これらの中では『稲荷俵』を取り上げてみよう。この咄は、東京にもあるが、もともと上方ダネのようで、明治二十年頃のものかと思われる、二代目桂文枝（弘化元年〜大正五年）の速記が残っている。明治以前の乗物と言えば駕籠で、右に挙げたネタの中にも、『いびき俵』のように、古くは『いびき駕籠』であったものを、明治になつてから人力に変えて演じるようになったものもある。しかし『稲荷俵』は、そうではないらしい。何故なら、駕籠だ

とすると、一人の客に、乗せ手二人が同時に騙されることになり、咄の設定として、やや不自然なところがあるように思われるからである。ともあれ、あらすじを記してみよう。

大阪、高津神社の前で客を待っていた車夫に、産湯稻荷までやってくれという客が現れる。車夫は狐に騙されるからと断るが、祝儀をはずむからと言われて、しぶしぶこの客を乗せる。すると、この客、「自分は稻荷のお使いで、よく乗せてくれた。近々、お前に福を与えてやる」と言っ、て、車代も払わずに降りて行ってしまふ。車夫が家へ戻ると、俵の中から、百五十円の大金が見つかる。俵屋はてっきり狐が授けてくれたものと信じ込み、長屋の連中や友達を集めて、お祝いの大酒盛りを開く。うまく狐の使いだと騙して、車代を払わなかった客は、大金を俵の中へ忘れたことに気が付き、車夫の家を訪ねて来る。車夫はすっかり狐の使いだと信じているから、その扱いは、もう丁重そのもので、客が「そないにされると、穴があったら入りたいぐらいや」「めっそうな。祠を立てて、お祭りしますがな」

産湯稻荷は、大阪市天王寺区小橋西之町にあり、明治期までは梅の名所として知られていた。この咄には、客の金縁の眼鏡、ハンカチ、香水の匂い、十円の紙幣、シャツのボタン等々、文明開化の頃の雰囲気をよく伝えるものがちりばめられている。また、産湯楼という料理屋、山吹といううどん屋なども出て来るが、これらも当時実在した、有名な店であった。この咄の舞台の周辺は、今はすっかり市街地になっているが、明治期は、夜になると淋しいところだったよう²で、気の弱そうな車夫が、狐に騙されないかと心配するのも当然な場所であった。前記の文枝の速記では、車代が二十銭だが、明治末期の速記では、三十銭に値上がりしている。こういうところは、当時の実情に合わせて、現代の咄として、こういうネタを演じていたことが窺われる。車夫の一日の稼ぎがどのくらいあったのかは未調査だが、

同じように車夫が主人公の『親売り』という珍しい咄では、親のいない車夫が、百円で親を売るといふ広告を見つけ、何とか金を工面して親を買うことにするといったことが発端になるのだが、やはり百円という金は、当時、夢のような大金であったに違いない。それを拾った車夫がお狐様の御利益と大喜びしたのは、当然であつただろう。『稻荷傳』という咄、客のちょっとしたいたずら心から起こつた失敗をテーマとした、小品ながら巧く出来た咄であると思う。

二

明治になって禄を離れた武士は、士族の称号を与えられたものの、実際の生活には困窮していた人々が多かつた。そこで新商売を始めたものの、悉く失敗し、下賜された金子を使い切つて、無一文になつてしまふ者さえ出て来た始末だつた。『西京土産』という、『応挙の幽霊』と『野ざらし』を一緒にしたような珍しい咄は、公債を使い果たした士族が登場する。咄の中には、そういう士族の失敗譚を扱つたものは、沢山残つてゐる。どちらかと言えば、東京のものに多いのは、それまで武士に虐げられていた江戸の町民の、一種のレジスタンスのなせるところかもしれない。『御膳汁粉』『素人鰻』『素人相撲』『素人洋食』『殿様団子』などが、士族の商法を扱つた咄だが、その嚆矢といふべきものは、三遊亭円朝（天保十年〜明治三十三年）作と伝えられる『御膳汁粉』であろう。これは、円朝が或る武家屋敷の前を通りかかつたところ、汁粉という旗が出ていたので、咄の種にでもなろうかと思つて中へ入ると、正装をした武家の娘がしずしずとお茶を運んで来るし、裏では元武士と思われる男が、袴姿に襷を掛けて餅を搗いでゐるので、びっくりして何も食はずに飛び出してしまつたという実体験に基づいて作られたものだといふ。御膳汁粉の由来を語つたもので、サゲらしいものではなく、ここから『素人鰻』へ続けて演じるというやり方もあつた。

この『御膳汁粉』を上方へ移植し、改作したのが、三代目桂文三（安政六年〜大正六年）で、現在よく演じられる

『ぜんざい公社』のもとである。国営のぜんざい会社が出来て、それを食べに行くと、書類の作成料が必要だったり、やたらと印鑑が必要だったり、いろいろ面倒な役所の手続きが必要だったという、当時の官員がいばっていたことを諷刺したものである。こういう、官に対する諷刺の効いた咄は、いろいろ形を変えながら、いつの時代にも、生き残って来たのである。落語という芸は、つねに大衆とともにあるということを、思わずにはいられない。

『素人鰻』（上方では『うなぎ屋』）は、今では、新米なので上手に鰻をつかむことが出来ない主人が登場するだけで、その男が元武士であったという設定は省かれ、難儀して鰻を素手でつかもうとするところの仕草が見せどころの咄になっている。これも、士族の商法ということが、人々の話題から遠くなった時点で、改作されたものと見ていいだろう。

このような文明開化の時分に、その時代の世相、風物を取り入れて創作されたと思われる咄は、相当な数にのぼるが、以下少し例を挙げてみよう。

『阿弥陀池』は、桂文屋（慶応三年〜明治四十二年）の作ということが確実で、彼がこの咄を初めて高座にかけた時のエピソードも伝わっている。それはともかく、この咄には、日露戦争が出て来るので、明治三十七、八年以後、³⁾彼が没するまでに創作されたに違いない。新聞を読んでいる男が、読まない男をからかうという設定からして、ちょうどその頃、新聞を読むという習慣が庶民にまで定着し始めなのである。作り話の中に登場する尼さんが、日露戦争で夫を亡くした未亡人であるなどというのは、やはり当時の世相を強く反映した咄であろうと思われる。

『アメリカ人の恋』は、演じ手の少ない咄になってしまったが、多くの新作を遺した二代目桂文之助（安政六年〜昭和五年）の作で、彼は、今も営業している甘味処「文之助茶屋」の創業者でもある。それはともかく、祇園を歩いていたアメリカ人が、舞妓に一目ぼれするというこの咄は、明治三十六年九月、祇園の芸妓加藤ゆきが、アメリカ人ジョージ・モルガンに十萬円で落籍され、翌年一月に結婚、渡米して世間の評判になった、いわゆる「モルガン・

お雪」の一件にヒントを得たものらしい。

『淫売五人』は、上方ダネの小咄で、遊郭を素材とした咄のマクラ等に使われる程度のものである。

道頓堀の橋の上で氷売りが、「氷、氷、一杯五厘、一杯五厘、氷、氷」と掻き氷を売っている。そこへ手錠を掛けられた女が五人、ぞろぞろと引き出されて通りかかる。それを見ていた通行人が、「おい、あの女、一体、何や」「あら、お前、淫売が上がりよったんや」「ああ、あの女、あら淫売かいな」「淫売、淫売五人、淫売五人」「どないなんねやろ」「拘留、拘留」

これだけの咄で、「一杯五厘」と「淫売五人」、「氷、氷」と「拘留、拘留」とを掛けた、実に他愛の咄だが、実は「淫売」という語は、文明開化の頃、警察でまず使われ始めた語で、しかもその時期は、氷を一杯五厘で、大衆向けに売り出すようになった時期とも重なるのである。『明治事物起源』によると、アンモニアを使って人工的に氷を製造し始めたのは、明治十六年十月のこと、又、同二十四年八月、神田小川町の氷店の値段表には、「氷水 一銭 氷蜜柑 二銭 薄茶氷 二銭五厘」等々であったと記されている。おそらくこの記事は、ちゃんとした店構えでの値段であって、この小咄に出て来る、露店の夜店のようなところで、分量もそう多くない氷であれば、一杯五厘という値段は妥当なところだったであろう。

『王子の幫間』は、鼻の円遊と称される初代三遊亭円遊（実は三代目、嘉永三年～明治四十年）の作と伝えられ、『百花園』第一卷十二号から十五号（明治二十二年十月～十二月）まで四回に亘って、その速記が掲載されている。主人公は神田に住んでいる平助という幫間で、王子に住んでいるというわけでも、王子の色街にいますというわけでもない。が、旦那に取り入って、金になると思えば、王子までも歩いて行く人物なので、こういう題を付けたものであ

ろう。そこで、考えてみなければならぬのは、円遊が、東京の町の、数多い郊外の中で、どうして王子を話材の中に選んで来たのかという点であろう。言うまでもなく、王子は、王子稲荷の初午、飛鳥山の桜、螢、紅葉と、江戸時代から庶民の行楽の地として賑わっていた。が、明治に入ってからは、王子製紙の工場が出来、同二十年にはそれが増設されて、その近代的な工場の見学を兼ねて、王子への行楽客が増えた時期があったらしい。おそらく、円遊は、それをすぐ、咄の中に取り入れたものである。が、この設定は今となっては分からないため、現在は、王子に住んでいる平助という幫間が、旦那に取り入ろうとして失敗するという演出に変えられている。

『火事の引越し』も小咄程度の咄で、次のようなものである。

江戸の華と言われた火事も、消防車が入って来てすぐ消えるようになったので、張り合いのなくなった火事の夫婦が、ある夜、田舎の方へ引越そうと相談をしている。その声に目を覚ました火事の子供が「ボヤも一緒に行く」

いわゆる消防ポンプなるものの輸入は、『明治事物起源』によると、明治四年のことらしい。そして消防自動車の登場は、ずっと遅れて、明治四十三年十月、大阪市が、当時の値段で、一万二百六十九円で購入したのが最初だということ。これに従うと、この咄、明治のごく末期か、大正に入ってからからの咄ということになるが、東京ネタであることは、「宿替え」という表現を使わずに、「引越し」と言っていることから明らかである。消防自動車の輸入については、なお調査の必要があるが、富山県の方言で、消防自動車のことを「ラフランス」と言うのは、当時輸入された消防自動車は、フランスのラフランス社製のものであったからだという。おそらく、明治中期には、各地で続々と輸入されるようになっていたものと想像される。

『束髪丁稚』は、二代目曾呂利新左衛門（初代桂文之助、弘化元年〜大正十二年）の作で、その主人公を丁稚から権助に変え、多少味付けをしたのが、初代三遊亭遊三（天保十一年〜大正三年）作の『権助の心意気』のようであるが、この二つの咄、どちらが先に出来たのかは、にわかには断じられない。しかし、いずれも鉄漿、結髪が衛生に悪いとして、その風習が廃れ始めた頃の作であることは間違いがなく、いずれも、お駄賃の金を目当てにしていたら、「金（鉄漿）付けると衛生に悪い」と、はぐらかされてしまうのがサゲになっている。明治十八年には「婦人束髪云」というものが結成されて、「旧習を破る者は衛生的な婦人」であるとされた時代の産物である。したがって、今日では、そのあたりをマクラに振っても演じにくく、全く演じ手は絶えてしまっている。

『写真の仇討ち』は、

女にふられた男が、腹いせにその女を殺し、自分も死ぬつもりだと伯父に暇乞いに来る。それを伯父がなだめて、晋の予襄の故事を引いて人の一念の恐ろしさを説き、男に女からもらったものを突くなり、破るなりして、恨みを晴らすようにと諭す。男が女の写真を包丁で突くと、血が畳の上へたらたらとこぼれる。「人の一念は、やはり恐ろしいものだ。写真から血が流れた」「いえ、私が指を切りました」

というものだが、これは古くは、女からもらった起請文を突くという設定だったのを、起請文が一般に通じにくくなった時代に、逆に一般的になって来た写真を突くというふうに変更したのであるが、晋の予襄の故事を引いて意見をするあたり、江戸の雰囲気を残しているようである。二代目五明楼玉輔（文政十二年〜明治三十年）の演じたという長編人情噺『開明奇談写真廻仇討』（明治十七年六月、滑稽堂刊）に、幕末、医学研修のために勝海舟に随行した松本彦之丞という青年が、維新後に帰国し、父彦三郎を毒殺した仇と出会うが、世は文明開化の時代で、すでに仇討禁止

令が出されていたので、仇の写真を刺して孝道を果たすという部分があり、『写真の仇討ち』は、これをヒントに改作したものと思われる。最近では、さらにタレントに振られたという設定にして、そのプロマイドを突き刺すというふうに変えて演じる者もある。

『宗論』は、同名の狂言のように、もとは浄土と法華というふうには、仏教の宗派同志の争いだったのを、明治になって、父親が真宗に凝り、息子がキリスト教の狂信者というふうには、益田太郎冠者が改作したものである。賛美歌などが取り入れられているところに、禁教を解かれた明治のキリスト教の布教活動が偲ばれる。

『写真の仇討』『宗論』の例のように、明治になって、時代に合うように改作されたと思われる咄は、実に多い。その多くは、お金の単位、乗物などであるが、一例を挙げると、『一円のお盆』というネタは、

遊女が客の前で、急に癪が起ったと仮病を使う。それを見抜いた客が、いい薬があると、お盆に一円札を敷いて、その上に丸薬を置いて差し出す。遊女はにこっと笑ってその薬を飲む。客が「どうや直ったか」「きれいに直りました」「そうか、そんならお盆返して」

という小咄であるが、幕末からあるもので、古くは小判を敷いた上に丸薬を載せたというふうには演じたものという。『白銅の女郎買い』という若い衆が吉原へ繰り込むという咄も同様で、白銅の五銭貨は明治二十二年に初めて作られたから、その時分に改作されたものであろう。改作しても不自然さが残っていないのは、逆に江戸末期が、落語という芸の円熟期で、笑いの質が高かったことを示しているとも言えるであろう。

『世辞屋』は三遊亭円朝作の数少ない滑稽咄の一つで、

新しく発明された蓄音機を使って、世辞屋という新商売を始める。いろいろなお世辞を吹き込んでおいて、人の代りにお世辞を言うのである。買いに来るのは、みんな愛想の悪い人ばかりだが、待合の娘、芝居茶屋の若い者書生など、いずれもそれぞれにぴったりのお世辞が用意してあるので、大繁盛する。最後にやって来たのが上長者で、これは店へ入って来るなり、あらゆるものを褒めちぎる。それを見て世辞屋は、箱を片付けてしまっ、「手前どもは、仲間売りは致しません」

蓄音機が普及し始めたのは、明治三十二年頃というから、円朝最晩年の作であるが、新しいものを咄に取り入れようという意欲は、衰えていなかったようだ。或いは、古くからある『徳利芝居』をヒントにしているのかもしれない。

『動物園』は、前出の二代目桂文之助の作で、今でも多くの人によって演じられるし、現・二代目桂枝雀によって、『White Lion』と題する英語落語にまでなっている。あらすじは記すまでもないほど、よく知られているが、

ぶらぶらと遊んでいる男に、伯父が移動動物園の虎が死んだので、その皮をかぶって檻の中へ入り、虎の真似をしていけば、いい日給になるという仕事を紹介する。早速引き受けて、体よくやっていると、虎とライオンの決闘を見せるといふ場内放送が流れる。約束が違うと、男が檻の隅で震えていると、ライオンが近づいて来て、「心配するな。おれも三円で雇われた」

日本で初めての動物園は上野動物園で、明治五年二月に、日比谷に博物館が出来たのがその最初で、当時は、生きた動物は少なかったものらしい。その後、変遷を経て、今の場所に移ったのは、明治十五年三月二十日のことで、虎がやって来たのは、同二十年二月、イタリアのサーカス団がやって来てからのことであつたようだ。サーカスの初来日は、明治四年十月のことで、それ以後、招魂社、浅草奥山などで興業されていたようだが、動物を連れたものは、明治十九年の夏から十一月にかけて、イタリアのサーカス団が、馬、ライオン、虎、象、駝鳥、猿などの曲芸を披露したのが最初のものである。おそらく、この咄に出て来る移動動物というのは、当時曲馬団と呼ばれた、サーカスの類のものであつたのではないだろうか。いずれにせよ、当時まだ珍しかったものを、すぐに取り上げた際物的な咄だつことは間違いないだろう。因に、この咄は、以前は『動物園の虎』と呼ばれていて、別に、文之助は『動物園の熊』という咄も創作している。こちらは、檻を逃げ出した熊に、一人の男が小豆を投げ付けたら、熊がごろっと倒れた。それもそのはず、「熊は金時には、かないません」というサゲのものであつたが、こちらは現在、演じ手がない。

『電話の散財』も二代目桂文之助の作で、

息子に芸者遊びを止められた親旦那が、息子の留守にお茶屋へ電話を掛け、馴染みの芸者に電話口で磯節を歌わせ、電話室へ酒肴を運ばせてご機嫌になっているところへ息子が帰って来る。「親父さん、どうしはりましたんや」「ええい、うるさい話中」

最初に電話の入って来たのは、明治十年のことで、ベルが発明した翌年のことであつた。始めは宮中など、限られた場所で用いられていたが、次第に普及し、東京・熱海間に開通したのが同二十二年、翌年に東京、横浜に電話交換局が設置され、大阪、神戸には、同二十六年三月に設置されたという。当然この咄、それ以降、船場あたりのかかりの

商家が電話を引き始めた頃のものに違いなく、二代目林家染丸（慶応三年～昭和二十七年）が得意としていたが、その後、演じ手がなかったのを、最近、現・四代目染丸が復活試演した。絶えていた理由は、昔は、大きな邸宅などには一室として設けてあった、電話室というものが、分かりにくくなってしまっていたからである。が、現代のように携帯電話が普及した時代になると、それを巡ってのいろいろなトラブルや失敗をマクラとして振り、「昔の電話というものは」と、わりに無理なく電話室というものの説明が出来るようになったため、また復活したネタというわけである。

『胴乱の幸助』は、稽古屋というものが、明治になっても大阪の町中には存在したことと同時に、咄の時代設定の年代が、かなり絞り込めるといふ、そういう意味では珍しい一例である。

一代で叩き上げ、相当な店を構えるようになった割木屋の親父、人呼んで「胴乱の幸助」は、これといった趣味は何もないが、ただ一つ、喧嘩の仲裁が大好き。ちょうど稽古屋の前を通りかかると、中で「お半長衛門」の浄瑠璃の稽古をしている。その嫁いびりのところを聞いて、本当のもめごとだと思ひ込み、幸助は、大阪から三十石船に乗り、京都、柳馬場押小路虎石町の西側へとやって来る。偶然、そこにあった帯屋へ飛び込み、あれこれ話をするが、もとより「お半長衛門」は架空のことで、話が噛み合わない。そうこうするうちに、浄瑠璃のことだと気が付いた店の番頭が、「あんた、それお半長衛門でっしゃろ」「そうや、お半長や」「そんなもん二人とも、とうの昔に桂川へ身を投げて死んでしまいましたかな」「えっ、死んでしもたか。しもた汽車で来たらよかった」

京都、大阪間に鉄道が敷けたのは、明治十年二月のことであったが、それ以後も、江戸時代以来の三十石船が淀川を

上下していた。上りは人の力で船を曳いて行くので、歩くのよりも遅かったらしいが、夜、天満の八軒屋を出て、翌朝、伏見寺田屋の浜に着くという夜船は結構人気があり、鉄道敷設後も、しばらくの間は、汽車と三十石船が、併走していた時期があった。この咄は、その時期に時代を設定しているわけであるから、おそらく明治十五年くらいまでの咄で、創作されたのもその間であろうと想像される。どこの町内にも稽古屋があり、『桂川連理柵』などを稽古する人も、実際にいたのであろう。

『秀吉の猿』は、

秀吉が、飼っている猿に目配せをすると、猿は諸大名に悪さをするが、誰も文句を言えない。ある時、秀吉の留守に伊達政宗がその猿をうんといじめておいた。秀吉がいつものように目配せをしたが、猿は政宗に睨まれて引き返す。と、今度は秀吉が睨みつける。猿は秀吉と政宗の間を行ったり来たりして「猿とは辛いね」

というもので、現在は森乃福郎がまれに演ずるくらいの、ごく珍しい咄である。というのも、サゲに使われている「東雲のストライキ、さりとて辛いね、てなことおっしゃいましたかね」という東雲節は、明治三十二年、名古屋旭新地の東雲楼の娼妓がストライキを起こして廃業した後起こったもので、それが全国的に流行したのは、同三十二年頃のことであった。だから、当時としては講談のように秀吉と政宗とが登場して来て、最後に東雲節でどんでん返しになるという奇抜さが、それなりに受けたものであろうが、この歌が耳遠くなった現在は、もう滅びて行くネタの一つと言っていいたろう。

『不動坊』は、二代目林家菊丸（生没年未詳）の作である。この人の伝記は、初代の息子で、大津絵や春雨の替歌などを、その場で作るのが上手だったということ以外、ほとんど不明な部分が多い。ただこの人の作と伝えられる咄

は、『猿回し』『吉野狐』『後家馬子』など数多い。そのいずれもが、どこことなく暗く、恵まれない境遇の人間を取り扱っているという点には、注意しておいていいと思う。例えば『後家馬子』で、長屋のおかみさんが、飯時でもないのに井戸端で米を研ぎ出す。訳を聞くと、亭主がやっと一仕事にありついて、金が入ったからだという。そんなことを何人かで話しているうちに、腕のいい髪結いの娘の稼ぎに頼って、自分は若い馬方に入れあげている後家の噂話となり、それがもとで喧嘩になり、今研ぎ上げたばかりの米が井戸の中へはまってしまって、又、ご飯が食べられなくなったと言って、子供が泣き出す、といったあたりの描写は実にリアルで、いわゆる貧乏長屋の生活を活写し得ていると思う。それに比べると、この『不動坊』は、何人もの演者の手を経て、笑いの要素が増えたものか、そう暗い部分は感じられない。ただ、亭主の講釈師が旅先で急死したため、残った家財を道具として、同じ長屋の男と再婚するなどという設定は、どこことなく暗い一面があり、明治期の裏長屋では、こうしたことも珍しいことではなかったのだろう。

講釈師、不動坊火焔が巡業先で急死したため、後家となった美人のお滝は、同じ長屋の利吉と再婚することになる。それが、同じような独り者の三人には面白くない。そこで、隣の長屋に住んでいる軽田胴斎という講釈師を幽霊に仕立て、「先の亭主の三十五日も済まぬうちに、別の亭主を持つとは不埒だ。それがうらめしくて成仏出来ぬ」と脅かしてやろうということになり、利吉の家の天窓から忍び込ませるが、胴斎の体をしばっていた紐が切れて、ばれてしまう。「お前は誰や」「軽田胴斎という講釈師で」「講釈師なら講釈してたらええんや。何でこんな真似をしたんや」「ええ、幽霊稼ぎ人でございます」

明治に入って、咄家、講釈師などは、お上から「遊芸稼ぎ人」という鑑札を受けないと、寄席への出演が出来なかつ

た。この咄は、それを「幽霊稼ぎ人」と掛けたものである。サゲとしてはあまり上等ではないし、今では全く通用しない語であるのにこの咄が生きているのは、『たらちね』のように利吉が、お滝を嫁にすることを風呂屋で一人で惚気たり、それに腹を立てた三人が、仕返しを企てるといったあたりに、今でも十分に通用する面白さがふんだんに盛り込まれているからであろう。なお、「遊芸稼ぎ人」という名称は、あまりにひどいというので、大正十四年四月、「技芸師」と改められている。

『藪入り』は、江戸時代からある咄で、久しぶりに奉公先から帰って来る子供を待ち侘びる親心が実によく出ているが、子供が懐に持っている金の金額の多さに驚いて、店の金をごまかしたのではと疑うところが、古くはバレだったのを、鼠捕りの懸賞に当たったというふうに変更したのは、明治三十三年一月、当時の東京市が、ペストの予防のために鼠を買い上げを行ったことをもとにしているものと考えられる。当時の記録によると、明治三十五年十二月二十八日から三十八年九月二十九日までに買い上げた鼠の数は、三百八十五万匹で、その懸賞金の総額は、八万五千円だったという。

その他、ドイツの薬の特許云々というくだりがある『牛の丸薬』、牛乳が一般に飲まれるようになった頃の作と思われる『牛の子』、東京見物、二次会などという設定が出て来る『源九郎狐』、明治中期、女学生を、その履いている袴の色から、「鶯色式部」などと称したことが出て来る『高野違い』、同じく明治中期、女郎上りの女傑と言われた富貴楼のお倉をモデルとしたという『五人廻し』、夫婦喧嘩を通りがかりの巡査が止める『賽投げ』、洋楽や銀行の頭取などの語が出て来る『芝居寿司』、どうする連の書生が登場する『蘇生』、ドイツ帰りの医者が登場する『ドクトル』、東西屋（今のチンドン屋）が登場する『棒屋』などが、明治に新作、又は改作された咄かと思われる。

また、咄の中には、とくに明治の風俗などは出て来ないが、明治期に活躍した落語家の作であると判明しているもの、又は、そう伝えられているものには、次のようなものがある。（円朝作の長編人情噺は除いた。）

『荒川の桜』

初代三遊亭円左（嘉永六年～明治四十二年）

『言訳座頭』

三代目柳屋小さん（安政四年～昭和五年）

『宇治の柴舟』

桂文屋

『泳ぎの医者』

二代目三遊亭円生（文化三年～文久二年）円朝補綴

『鰻沢』『黄金餅』『文七元結』

三遊亭円朝

『芝浜』『心眼』『大仏餅』『富久』『笑茸』

伝、三遊亭円朝

『にゆう』

三代目（？）司馬龍斎（生没年未詳）円朝改作

『金魚のお目見え』

初代三遊亭円遊

『旦那の雑煮』『猫芝居』『弁天詣り』

伝、三遊亭円遊

『首ったけ』

伝、四代目三遊亭円生（弘化三年～明治三十七年）

『米揚げ笊』

伝、初代桂文団治（天保十四年～明治十九年）

『指南書』『象の足跡』

二代目桂文之助

『茶碗屋政談』

伝、二代目桂文之助

『千里の藪』『解けやらぬ下の関水』

二代目曾呂利新左衛門

『成田小僧』

伝、二代目春風亭柳枝（文政五年～明治七年）

『よかちよろ』

初代三遊亭遊三（天保十一年～大正三年）

『佐々木裁き』『松茸狩り』

三代目笑福亭松鶴（弘化二年～明治四十二年）

これらは、いずれも落語家自身が創作したものであるが、明治期になると、いわゆる落語作家と言うべき人物も登場

する。益田太郎冠者、岡鬼太郎、鶯亭金升などがそれである。それらの作を挙げてみると、

益田太郎冠者 『女天下』『かんしゃく』『堪忍袋』『道楽書生』

岡鬼太郎 『意地競べ』

鶯亭金升 『応挙の幽霊』

河竹黙阿弥 『鰐沢二席目』

今村信雄 『試し酒』

仮名垣魯文 『探偵うどん』(伝)

などがある。いずれも明治の風俗、当時の人々のものの考え方などもよくあらわれていると同時に、次章で述べるような翻訳ものと思われるものや、サゲを外国の小咄から取っていたりするものがある点に、注意しておく必要があるだろう。これらの中で、今日でも演じられるのは、『かんしゃく』『堪忍袋』『応挙の幽霊』『試し酒』などで、『試し酒』は、今村信雄が中国の咄をもとに翻案し、それを外国人落語家として有名だった快樂亭ブラック(安政五年(大正十二年)が補綴したものが、「百花園」四巻四十五号(明治二十四年三月五日)に、『英国の落語』として載っている。

四

小咄などの原典が、中国の『笑府』にあるというように、中国からのネタの輸入は旧幕時代から行われていた。が、

明治になって、欧米の文学が輸入され、それが相次いで翻訳、出版されるようになって、文芸、思想を始め、日常生活の中へも、欧米文学の影響が浸透するようになって行ったのは言うまでもない。落語もその影響を受けて、欧米ダネのもの、或いはそうではないかと疑われるものがいくつ也存在する。

そんな中で、最も多くの翻訳物を手掛けたのは、三遊亭円朝であった。彼は、福地桜痴の教示を得て、いくつもの作品を遺しているが、それらは高座に掛けられたというよりも、むしろ新聞連載の読み物、或いは、劇化上演されることが多かったという点には注意しておく必要があるだろう。と同時に、円朝の翻訳物は、単に原作を日本に置き換えたというだけではなく、彼の興味のある点をふくらませて、むしろ創作と言ったほうがいいような、原作にはない部分が多いということも、その特徴として挙げておく必要がある。そして、それらはいずれも、いわゆる落し咄ではなく、長編人情噺になっていることも注意すべきことであろう。『三遊亭円朝全集』第六卷には、以下の作品が収載されている。

『名人くらべ』

フランスの劇作家サルドウの史劇「ラ・トスカ」を福地桜痴から聞いて翻訳。「やまと新聞」明治二十四年七月二十三日から十二月十六日まで連載。

『指物師名人長』

モーパッサンの「親殺し」を有島武朗・生馬兄弟の母、幸子より教えられ、円朝と親交のあった実在の人物をモデルに翻案。「中央新聞」明治二十八年四月二十八日から六月十五日まで連載。

『黄蔷薇』

「毒婦ジュリアン」を福地桜痴から聞いて翻案。明治二十年四月、金泉堂刊。当時の官吏、書生などの考え方がよく現れた作品とされ、事実、好評を博したもののか、たちまち版を重ねている。

『松の操美人の生理』

フランスの「侠客」を描いた「生き埋め」を福地桜痴から聞いて翻訳。「やまと新聞」明治十九年十月七日から十二月二日まで連載。

『英国孝子ジョージ・スミスの伝』

福地桜痴からの聞き書きであろう。明治十八年七月から八月にかけて、速記研究会から、和綴本で月に四冊ずつ、計八冊刊。

『英国女王イリザベス伝』

明治十八年八月、彼が伊香保へ避暑の折に書いたもの。没後、遺稿の中から発見され、大正十二年「鈴の音」に掲載。

以上が、三遊亭円朝の翻案ものであるが、いずれも名人の作らしく、小説的な面白みはあるが、笑いという方面から見ると、異質なものと言えよう。

それでは、いわゆる落し咄のほうでそういうものを探してみると、よく引き合いに出されるのが、円朝作と伝えら

れる『死神』である。これは、リッチ兄弟作のオペラ「クリスピーノと死神」からの翻案という説が支持されて来たが、このオペラは、横浜へ入って来た、いわゆる三文オペラでも、ほとんど上演されたことはなかったらしい。もちろ^ん、オペラの筋だけを誰かから聞いたという可能性はないが、それよりも、このオペラ自体が、グリム童話の第四十九話「死神の名付け親」を典拠としているので、『死神』もグリム童話からの翻案と考えたほうがよさそうに思われる。但し、明治期に翻訳されたグリム童話には、「死神の名付け親」は入っていないようで、グリム童話の完訳は、大正十三年まで下るようだが、それにしても、「死神の名付け親」の筋を誰に伝え聞いて、それを翻案したというほうが、蓋然性は高いように思われる。

「文芸倶楽部」第十一巻十四号（明治三十八年）所載の二代目三遊亭円馬の速記『三人兄弟』は、現在は所演を聞かないようだが、

ある大金持ちに三人の息子がいたが、三人ともに定職がない。父親に「財産を譲るには、稼ぎの方法を知らなければならぬ」と言われ、長男は易者、次男は盗人、三男は裁縫師を志し、それぞれ三年の期限を定めて修行に出る。三年経って、三人はそれぞれの達人となって戻って来る。その時、国王の娘が暴風雨の夜に失踪するという事件が起こり、王は姫を捜し出した者を婿にするという触れを出す。これを知った三人は、それぞれ自分の腕の見せ所だと、協力して姫を探すことにする。長男は易によって、姫は南方の島にいる大蛇にさらわれたと占う。そこで三人は、船を仕立てて島に渡り、次男がまんまと大蛇のところから姫を盗み出すが、途中、嵐に遇って船底が破損してしまった。三男はそれを針と糸でうまく縫い合わせて、何とか修理し、無事、姫を連れて国へ戻って来た。王は、三人ともに手柄があったので、姫を三等分して、首を長男に、胴を次男に、足を三男に与える。長男と次男は、こんなものを貰っても仕方がないと捨ててしまったが、三男はそれを拾い集めて縫い合わせ、自

分の妻にした。

という筋のもので、速記の冒頭部に、「これは近頃洋行帰りの方からこういう話があちらにあると聞いて、筋だけうかがったものに手を入れたもので」とあるところからも明らかのように、西洋ダネに違いない。残念ながら、その典拠を明らかにしていないが、『千一夜物語』あたりでありそうな感じの話である。

『算段の平兵衛』は残酷な話だが、次のようなあらすじのものである。

庄屋が、お花という妾を持っていたが、本妻にばれてしまったので、いささかの金を渡して、平兵衛の女房に押し付ける。平兵衛はその金を使い果たしてしまうと、庄屋を美人局でゆすろうと企み、家へ引っ張り込んだが、「間男見つけた」と踏み込んだ途端、庄屋は驚いて心臓マヒで死んでしまう。平兵衛はその死体をついで庄屋の家へ行き、庄屋の帰りが遅いと言って怒っている本妻と家の外から庄屋の声色を使って話し、「家へ入れてくれなければ、首を吊って死ぬ」と言う。「死ぬるもんなら死になはれ」と本妻に言わせ、平兵衛は庄屋が柿の木で首を吊ったように見せかけて逃げ帰る。本当に首を吊ってしまったと信じた本妻は、何とか庄屋の死をごまかしてもらおうと、金を包んで平兵衛のところへ頼みに来る。平兵衛は、また死体をついで、隣村の盆踊の暗闇の中へ紛れ込み、死人の冷たい手で、踊の衆の顔をぺたぺたと撫でる。隣村の衆は、「うちの盆踊をつぶしに、誰か忍び込んだに違いない」と思って、皆で割木で一斉に殴りかかる。平兵衛はそこへ死体を投げ出して、逃げ帰ってしまう。隣村の衆が松明を灯して、見ると庄屋が死んでいる。隣村の庄屋を殴り殺したということがばれると、村同志の喧嘩になって大変なことになりかねないと、隣村の者が何とか始末をつけてくれと、また金を包んで平兵衛のところへ相談にやって来る。平兵衛は庄屋が酒に酔って、崖から落ちたように見せかけ、一件落着

し、平兵衛の手元に大金が残る。そんなことがあってから、按摩の徳という男が、事情を知ってか知らずか、何かにつけて平兵衛のところへやって来ては、金をたかる。村人がそれを噂して、「平兵衛みたいな男に付け込んでたら、えらい目に会わされるで」「さあ、そこが盲平兵衛(蛇)に怖じずや」

かなり複雑な筋だが、これが現在、桂米朝によって復活されている形のもので、もとはもう一度殺されるところがあったという。要するに、何度も、一人の人間を、自分が殺したと誤解させるところがこの咄の面白さであるが、このよ^⑧うな何度も殺される死体の話は、ヨーロッパの民話に数多い。宇井無愁は、フランス十三世紀のファブリオにある一話を紹介しているが、類話は『千一夜物語』の第二十五話にもある。死体が殺される段取りは、『算段の平兵衛』と^⑨はいずれも異なるが、もしこのネタが、西洋のものをヒントにしているとすれば、『千一夜物語』のほうではないかと思われる。というのは、『千一夜物語』は、明治のわりに早い時期に翻訳されているからである。ただこのネタは、日本の昔話にも、「知恵有殿」などの、狡猾な知恵を働かして成功するという一類があるので、完全に翻案物かどうかは、断定することは難しい。いわゆる民話と称されるものと落語とのつながりの根は、非常に深いからである。

『一日公方』も珍しい咄であるが、これはマーク・トゥエインの『乞食王子』にヒントを得たのではないかと思われる。

麻布六本木に住む大工の市兵衛は大層な親孝行者で、ある日、最賃になっている麻布十番の茶道家、珍齋のところへ遊びに行く。ちょうど一人の客が来ていて、市兵衛はその客の顔を眺めていたが、いきなり表へ飛び出して、酒を買って来てその客に勧め、「少し残して置いておくんせえ。あっしが貰いますから」と客の残りを飲み干

し、「これで死んでもいい」と言う。訳を聞くと、その客が公方様にそっくりで、公方様に盃を戴いたような心持ちだからだという。客は「面白い男じゃ。そちには何か望みはないか」「出来っこねえが、一日でもいいから、公方様になってみてえ」と言うと、客は珍齋に耳打ちをし、珍齋は酒の中へ眠り薬を入れた。これを飲んだ市兵衛がぐっすり寝込んでしまったのを見て、乗物に市兵衛を担ぎ込み、お城へ運び入れてしまう。市兵衛が目覚めますと、侍女が「君にはお目覚めでございますか」などと言うので、市兵衛は狐につままれたような気分。が、その気になり、「麻布の市兵衛という男が貧乏で困っているから金を与えよ」と命じたりする。そのうちに料理が運ばれ、酒を飲んでいるうちに、また眠り薬が入っていたとみえて、市兵衛は寝込んでしまう。その間に自宅へ送り届けられた市兵衛は、「自分は公方だ」とお城へ飛んで行くが、狂人扱いにされてしまう。訳が分らなくなった市兵衛が珍齋のところへ行くと、また公方様がお忍びで来ている。「そのほうの望みは叶うたか」と言うので、本物の公方と知って市兵衛が仰天していると、「その方の親孝行にめで、住みおるところの一町四方をその方へ遣わす。今日よりは市兵衛町と称えよ」「有難う存じます。けれど、ちつも訳が分りません。市兵衛が公方で、公方が市兵衛で、どう考えても……」「まだ分らぬか」「こいつは麻布で気が知れねえ」

サゲは、昔の江戸の通言を利用したもので、この咄も、筋立て自体、『乞食王子』と同じというわけではない。が、一日だけ公方になるという発想には、西洋の匂いがするような気がしてならない。因に『乞食王子』は、明治三十三年十月に、巖谷小波らによる翻訳が出ている。

『堪忍袋』は益田太郎冠者の作で、

夫婦喧嘩の最中にやって来た旦那が、腹の立つことがあったら、堪忍袋を縫って、その中へ怒鳴り込むようにと

教える。女房が縫い上げるのを待ち兼ねて、亭主がその中へ怒鳴り込み、後は気持ちよさそうに笑う。今度は女房が怒鳴り込み、こちらもここにこしている。これを聞いた隣家の亭主が、自分もやらせてほしいと女房の不満を怒鳴り込んで帰る。その晩、大工の辰さんが酔っ払って戻って来て、仲間と喧嘩してくやしから怒鳴り込ませてくれと、無理やり引っ張った途端、紐が切れて、中にたまっていたのがあふれて、「馬鹿、間抜け、出て行け、こん畜生、わわわわわ……」

というあらずじだが、これも『王様の耳はロバの耳』等にヒントを得たものではないだろうか。

『子供の洋行』は初代三遊亭円左の速記が、『百花園』二百二十二号（明治三十二年五月三日）にある。同三十二年二月に開通した、東京・大阪間の電話のことが取り入れられていて、際物的な新作だったようだが、こういう世界一周のような冒険談と言うべき一類の咄は、他にも『世界一周』『体内旅行』『風船旅行』『雷飛行』など、いずれも滅びた咄ではあるが、わりに数多い。『島巡り』『唐茶屋』など、江戸期からの咄にも海外へ行くものはあるが、おそらくこれらは、明治初期に翻訳されて、大人気を得たというジュール・ベルヌの『八十日間世界一周』などの一連の冒険旅行ものや、『ガリバー旅行記』などの刺激を受けたものであろう。『風船旅行』のように気球に乗って世界一周をするというような咄は、文明開化の頃には、打ってつけの話材だったかと思われる。

『品川の豆』『源太の産』はいずれもバレ咄だが、前者はアラビアなど、世界各地に類話があるという。後者はフランス小咄に、修道院へ男が忍び込んでいるのがばれて、老尼が一人一人の体を検査して行くという筋のものがあるという。『懸け橋』『まちがい』『寝言』なども、未調査ながら、フランス小咄的な味わいのあるもので、それらの移入ではないかとも思われるが、案外バレ咄というのは、どういうわけか世界に共通しているものも多いので、即断は禁物であろう。

本稿は、平成八年二月、東京国立文化財研究所芸能部より国内招聘研究員として招かれ、「明治の寄席芸」についての共同研究をした折の成果の一部をもとにしたものであるが、系統立った論考と言うよりは、思いつくままを述べたに過ぎない点が多いことをお詫びするとともに、深く反省している。この点については、さらに調査を重ねて行く所存である。ともあれ、古典落語と称されるものが、存外、明治期に新作されていること、また明治期に完成されたものが多いということは、確認出来たかとは思ふ。

注

- (1) 『嘶本体系』第七巻による。
- (2) 『米朝落語全集』第二巻所収「稻荷車」解説参照。
- (3) 桂米朝『上方落語ノート』二七四頁 昭和五十三年十二月 青蛙房刊によると、桂南大からの聞き書きとして、初めの「阿弥陀が行けと言いました」というのをサゲだと思った下座の人が、ドンドンと受け囃子を入れたので、文屋はあわてて、「違う、違う、まだ先があるのや」と制して、続きを演じたとある。
- (4) 石井研堂『明治事物起源』（明治文化全集別巻）による。以下、明治の文物移入、流行などは、多くこれによった。
- (5) 桂米朝『続・上方落語ノート』二二六頁 昭和六十年二月 青蛙房刊 によると、この咄のものは、英国のジョーク集にあるという。
- (6) 昭和五十年十月 角川書店刊。
- (7) 東大落語会編『落語事典』昭和四十四年 青蛙房刊など。
- (8) 『米朝落語全集』第三巻所収「算段の平兵衛」解説による。
- (9) 「上方芸能」六十六号 昭和五十五年六月。